

TEMPUS テンパス



2002年(平成14年) 12号



『近木郷を考古学する - 役所・寺・街道 - 』



歴史文化セミナー



貝塚市の文化財を指定

進む、要家文化財総合調査

文化財トピックニュース
『近木郷を考古学する
- 役所・寺・街道 - 』開催!

平成 13(2001)年度の
埋蔵文化財発掘調査

市内の古文書から



貝塚市の文化財を指定

～ 平安・鎌倉時代の仏像 3 点 ～

教育委員会では、平成 7 年度より「文化財専門調査」として市内の社寺等に残る仏教美術品の調査を行ってきました。この成果に基づき、平成 14 年 1 月 31 日付けで平安・鎌倉時代の彫刻 3 点を新たに市の文化財として指定しました。3 点とも市内山手地域の美術史上あるいは仏教文化を考える上で貴重な作品です。

有形文化財 美術工芸（彫刻）

名 称	員 数	法 量	所有者	時 代
孝恩寺木造阿弥陀如来立像	1 軀	像高 95.0 cm	孝恩寺	鎌倉時代前期
常福寺木造菩薩立像	1 軀	像高 100.8 cm	常福寺	平安時代後期（12 世紀）
常福寺木造僧形坐像	1 軀	像高 45.3 cm	常福寺	久安 5 年（1149）

孝恩寺木造阿弥陀如来立像

（こうおんじもくぞうあみだによらいりゅうぞう）

阿弥陀如来立像は当寺の本尊として信仰されています。頭部には肉髻（にっけい）という頭部の盛りあがった形を表し、身には衲衣（のうえ）・裳（も）をまとい、左肩には袈裟（けさ）、右肩には偏衫（へんざん）をかけ、両手とも第一・二指を結んで蓮台（れんだい＝蓮華の花をかたどった台）上に立ちます。構造は、ヒノキ材の割矧造（わりはぎづくり）で、彫眼（ちょうがん）とし、全身漆箔（しっぱく）仕上げとしています。おだやかな表情と体軀（たいく＝体つきのこと）の表現された鎌倉時代前期の作品です。



孝 恩 寺

孝恩寺は、木積（こつみ）に所在する浄土宗寺院です。奈良時代に行基（ぎょうき）が開創したと伝えられる観音寺が起源といわれています。現在残る観音堂（通称釘無堂）は鎌倉時代の建物で国宝に、平安時代の仏像 19 体と板絵 1 点は重要文化財に、また木造持国天立像は本市の文化財に指定しています。

ミニ用語解説 木彫の技法

一木造：像の頭部と体部の根幹部を一材から彫りだす木彫の技法。

割矧造：木彫像を制作途中で木目にそって割りはなち、内部を割りぬいた後、接合して仕上げる技法。

彫 眼：木彫像の表面を直接彫ってあらわした眼のこと。

常福寺木造菩薩立像

(じょうふくじもくぞうぼさつりゅうぞう)

菩薩立像は、頭部を垂髻(すいけい)という形に結び、身には条帛(じょうはく)・二段返しの裳・天衣(てんね)をまとい、両手とも第一・三・四指を曲げ、左に少し腰をひねって蓮台上に立ちます。指の曲がり具合とそのポーズから、もとは蓮華(れんげ)の茎を両手でもつ日光菩薩像であったかと思われます。日光菩薩は、本来は月光菩薩(がっこうぼさつ)とともに薬師如来の左右に配される脇侍(きょうじ)となります。構造はヒノキ材の割矧造で、彫眼とし、肉身部(にくしんぶ)は金泥(きんでい)塗り、衣部は漆箔仕上げとしています。かわいらしい垂髻、丸くおだやかな顔、なで肩で細身の軽やかな立ちポーズ、優美にととのえられた衣文(えもん=衣の折り目のこと)などから、平安時代後期12世紀の制作と考えられます。



常福寺

常福寺は蕎原(そぶら)に所在します。伝承によると、永正9年(1512)に開創され、もとは真言宗寺院でした。その後、元禄年間(1688~1704)に浄土宗に改宗されたといひます。

常福寺木造僧形坐像

(じょうふくじもくぞうそうぎょうざぞう)

僧形坐像は、地元では「ピンズル」さんとして信仰されてきた像で、もとは昭和16年(1941)まで当寺の境内にあった釈迦堂に安置されていました。ピンズルとは、釈迦の教えを守りつたえる使命をもつとされる十六羅漢(じゅうろくらかん)のうちの賓度羅跋羅墮闇(ひんとらばらだじゃ)のことを指します。構造は、ヒノキ材の一木造(いちぼくづくり)で、彫眼とし、素地(きじ=はじめのままの状態のこと)をみせます。面部、両耳がなく、膝前材も亡失し、全体的に磨耗していますが、大きく奥行きのある丸い頭部やなで肩でやや浅い胴部に平安時代後期の様式を伝えています。

背面には「久安五年巳三 一 / 釈迦堂建立ノ工」という市内最古の墨書(ぼくしょ)があります。



ミニ用語解説 仏が身にまとうもの

条帛: 菩薩・明王・天部像などが肩から脇にかける布。

天衣: 菩薩・明王・天部像などが肩からたらずショールのような布。

衲衣: ぼろぎれをつづりあわせて作った一枚布の衣で、如来がつけている。

進む、要家文化財総合調査

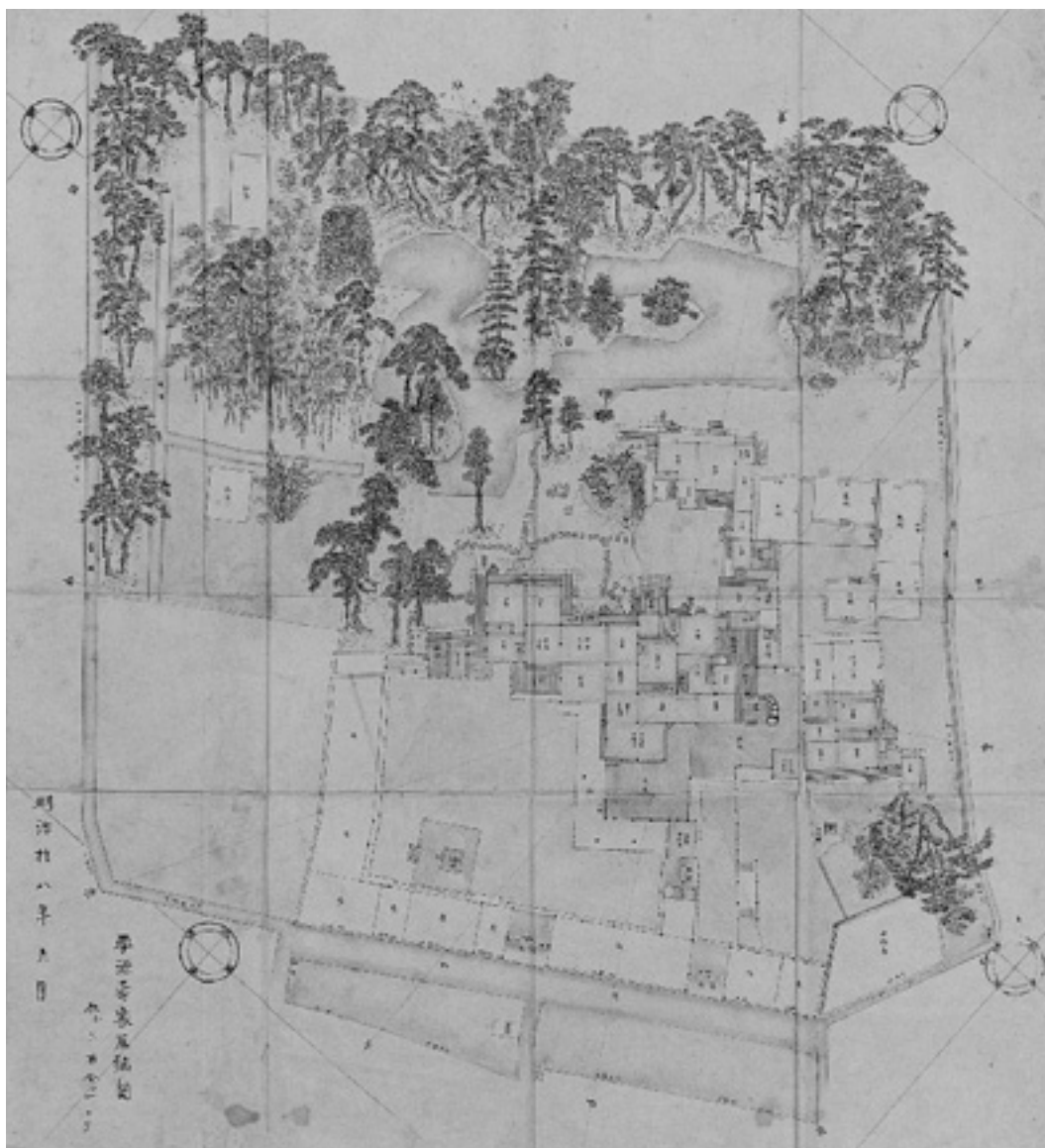
平成 13 年度から 5 カ年計画で畠中の要家に残る各種文化財の調査を進めています。1 年目は古文書の整理、邸内の植生調査、発掘調査を実施しました。

古文書については、数万点に及ぶ全体像をつかむため 1 点ごとの分類整理を継続しています。この場所は加治・神前・畠中遺跡に含まれ、根来合戦の畠中城跡の伝承がある所です。邸内の東側で小さな発掘調査を行いました。これからの成果を踏まえ、来年度以降も調査を継続していきます。今回は植生調査と古文書調査についての成果についてご紹介します。

植生調査

植生については、邸内に生育する植物の種類を記録しました。また、庭園では楠・棕・椿など屋敷林を構成する立ち木を中心とした分布実態の記録を行いました。

邸内に生育する植物は、70 科 172 種に及ぶものでした。また、本宅北側の庭園部に広がる屋敷林は、これら多様な種類によって生態系が維持されていることが確認されました。住居域の緑地空間として貴重なものです。



要家屋敷図 (明治 18 年 6 月)

要祐一氏蔵

古文書調査

要家の蔵には数万点規模と思われる大量の古文書が保存されています。昭和38年に『要家文書目録』を作成しています。当時は、主要なもの3,203点を整理調査しただけで明治以降のものは割愛され、大部分は未整理のまま残されました。現在進めている調査は、これまでの未整理分も含め、要家文書の全容を明らかにすることを目的としています。

平成13年度は、約7千点の古文書を整理しました。その中には、テンプス10号でも紹介しました享保6年(1721)から天保12年(1841)にかけての「日記」(途中欠落あり)のほか、年貢勘定帳といった村民一人ひとりが納めた年貢の記録や、周辺村役人からの手紙などを確認しています。

また、明治時代の教科書類やノートなども見つかり、当時の学校教育の様子を垣間見ることができます。



書類を収めた長持



リュウキュウマメ柿の葉と蕾



邸内庭園の様子



邸内庭園の様子

文化財トピックス

最近の文化財ニュースをお届けします!!

郷土資料室特別展

『近木郷を考古学する - 役所・寺・街道 - 』開催!



特別展ポスター



展示図録表紙

平成 14 年 1 月 16 日 (水) から 3 月 18 日 (月) にかけて「近木郷を考古学する - 役所・寺・街道 -」を貝塚市郷土資料展示室 (貝塚市民図書館 2 階) で実施しました。市役所周辺を含む一帯は古代に「近木郷」と呼ばれ、発掘調査では昨年市内初の瓦窯を発見した加治・神前・畠中遺跡などの調査を含め、さまざま成果を得ています。旧石器時代から平安時代の遺物を約 450 点展示し、近木郷の歴史を発掘調査成果をもとに総合的に展示しました。

開催期間中には、2 月 9 日 (土) 3 月 9 日 (土) の 2 回の講演会 (かいつか歴史文化セミナー) を行いました。2 月 9 日は岸和田市教育委員会の玉谷 哲氏を講師に招き「近木郷の中世 - 寺院と街道 -」と題してご講演をいただき、その後、近木郷に関して講師と本課 学芸員とでミニシンポジウムを実施しました。

3 月 9 日には「平成 13 年度の発掘調査成果速報」と題して「森下代遺跡の調査」と「地蔵堂丸山古墳の調査」2 件について本課 学芸員が、発掘調査の成果を遺物の展示とスライドをまじえて報告しました。

また、『近木郷を考古学する - 役所・寺・街道 -』の特別展示図録を刊行いたしました。本書では、展示した遺物の写真と詳しい解説文をのせています。

お求めは社会教育課または郷土資料室まで。 一部 500 円



講演の様子



調査報告の様子

平成 13(2001)年度の埋蔵文化財発掘調査

平成 12 年 4 月から平成 13 年 2 月現在、26 遺跡 59 地点の発掘調査、遺跡外 5 地点の試掘調査を行っています。いずれも小規模な面積の調査ですが、一定の成果を得ました。

本市最古の寺院である秦麿寺（はたはいじ）に関係した人々の集落と考えられる半田北遺跡（はんだきたいせき）では、奈良時代の掘立柱建物や土坑を検出しました。遺物は土器が多数出土しているほか、秦麿寺出土と同じ単弁八葉蓮華文軒丸瓦や文字を線刻した平瓦が出土しました。凹面にヘラで文字を刻んでおり、上は「部」下は「乃」の 2 字が読み、市内でも貴重な文字資料となりました。

窪田遺跡・窪田麿寺（くぼたいせき・くぼたはいじ）麻生中下代遺跡（あそなかしもだいいせき）では中世の柱穴を検出しました。窪田遺跡・窪田麿寺では中世集落域がさらに南に広がっていたことが確認され、中世の建物跡は周辺の遺跡でも検出しており、沢地区の中世集落域を考える上で重要なものとなりました。

山手地区に位置する木積観音寺跡（こつみかんのんじあと）では、中世の耕作に伴う層や鋤溝を検出し、中世以降に農地が広がっていたことがわかりました。

中世～近世の遺跡である貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）では、町屋の状況を確認しました。また、寺内町南側を区画する濠の一部を検出しました。これに続くと考えられる濠は今までに検出されており、濠が段丘崖に沿って続いていることが明らかになりました。

テンプス 11 号で紹介した森下代遺跡（もりしもだいいせき）地蔵堂丸山古墳（じぞうどうまるやまこふん）もこれら調査のひとつです。遺跡名、調査面積は下の一覧表に掲載しましたので参照してください。

参考・引用文献 貝塚市教育委員会 2002『貝塚市遺跡群発掘調査概要 24』貝塚市埋蔵文化財調査報告第 62 集

遺 跡 名	件 数	調査面積 (m ²)	遺 跡 名	件 数	調査面積 (m ²)
加治・神前・畠中遺跡	13	197.55	沢新開遺跡	1	7.50
海塚遺跡	1	7.50	沢新出遺跡	1	1.80
貝塚寺内町遺跡	8	96.70	地蔵堂遺跡	2	21.50
王子西遺跡	1	5.22	地蔵堂丸山古墳	2	52.40
窪田遺跡・窪田麿寺遺跡	2	25.30	津田遺跡	1	3.90
高井天神麿寺・高井城跡	1	22.00	土生遺跡	1	4.00
今池遺跡	1	34.40	半田北遺跡	1	52.00
三ヶ山西遺跡	2	123.20	福田遺跡	1	6.30
新井・鳥羽遺跡	1	5.50	堀秋毛遺跡	1	12.00
新井・鳥羽北遺跡	1	3.50	麻生中下代遺跡	1	16.30
新井ノ池遺跡	2	13.70	名越遺跡	1	7.14
森下代遺跡	2	2106.15	木積観音寺跡	5	35.75
水間墓地	1	2.10	合 計	41	2988.12
沢城跡	5	345.30	遺跡外	5	86.50

平成 13(2001)年度発掘調査一覧

市内の古文書調査から

郷土資料室では、開室以来市内の古文書調査を継続して行なっています。ここでは、最近の調査の一部を紹介します。

石才宮座共有文書

石才には市杵島（いちきしま）神社、あるいは弁財天社と呼ばれる一つのお社があり、近世から石才の人々によって氏神として祀られていました。このように村の氏神をお祀りする集会のことを宮座といい、現在も残るものとしては、市内では数少ない貴重なものです。古くから、石才に暮らす人々のうち、17歳を迎えた男子が宮座に加入（「座入り」）するしきたりで、今も続けられています。

この石才宮座では、こうした伝統行事もさることながら、近世からの古文書類44点をおさめた帳箱を代々受け継ぎ、大切に保管してきました。そのなかには、宮座のきまりや、宮座内部の争いごとを仲裁する約定書、さらには宮座の共有地に関する記録などが含まれており、近世から続く宮座がどのように継承されてきたのか、その変遷をみてとることができます。



帳箱

『貝塚市内の仏像』刊行のお知らせ

市内に残る主な仏像約70体を紹介した冊子を刊行いたしました。今回記事の中で紹介した本市指定文化財の仏像3体も含まれています。

本書では、仏像1体1体についての写真と詳しい解説文をのせています。お求めは社会教育課または郷土資料室まで。

一部 500円



編集後記

3月、沢城跡で発掘調査をしています。今回の文化財トピックスで紹介できませんでした。次回をおたのしみに。

「近木郷を考古学する」ご覧になられましたでしょうか？

これからも貝塚市郷土資料展示室で特別展を実施しますのでぜひおこしください。歴史文化セミナーも参加してください！



かいつか文化財だよりテンプス12号



平成14年3月29日発行

貝塚市教育委員会

〒597-8585 貝塚市畠中1丁目17-1

☎(0724) 23 2151

印刷 (株)中島弘文堂印刷所

テンプスとはラテン語で「時」を意味します